

腰痛 第2版

菊地臣一 ● 編著

〔評者〕折田純久(千葉大大学院助教・整形外科)

腰痛は国民愁訴で第1位を占める慢性疾患である。しかしながら、その発症機序や病態は十分にわかっておらず、病態や治療のすべてが科学的に構成されたものではない。その結果、治療成績は停滞し腰痛の治療成績に向上は認められていない。

本書は、わが国の腰痛研究の第一人者としてこの分野をけん引されてきた編著者の菊地臣一先生の衝撃的な告白から始まる。腰痛研究の重鎮の独白には、現代の腰痛診療に携わるわれわれの発奮と自戒を促すに十分な重みと深みがある。目覚ましい近代化と医療技術の発展が進む現代において、その全容が全くと言っていいほど不明である腰痛という病態は、むしろそのコントラストと存在感を強め挑発的にわれわれの眼前に未明の深海のごとく横たわっているのである。

それでは、われわれはどのように腰痛診療に携わっていくべきか。「腰痛を知るのではなく、どう考えるかについて考察する」。このようなコンセプトに則り厳選された各分野の第一人者により執筆・編集された本書は多くの知見と示唆に満ちた、いわば腰痛診療に関わるバイブルともいえるべき1冊であり、それは本書の随所からみて取ることができる。初版は遡ること約10年前、2003年に発刊されたが、このコンセプトは脈々と受け継がれている。

芳醇なワインを連想させる深みのあるガーネットカラーの表紙をめくり、「腰痛」という大海に冒険に出るがごとくはやる気持ちを抑えながら目次を開く。飛び込んでくるのは腰痛の病態や検査、治療など日常診療の基本事項のほか「誤診例と治療難航例からみた診療のポイント」など、腰痛診療に関わる者が常に疑問を馳せながらもなかなか答えを見つけない項目である。最後の大きな項目「腰痛を考える一私の疑問」では編著者自身の疑問も織り交ぜた腰痛への思念が記述されており、本書の腰痛哲学の重みを磐石たるものとしている。かと思えば、「腰痛の病態」の項目では「形態学」「機能」「臨床研究」の各々の視点から腰痛の病態が多角的にかつ明解に記載されており、その明快さは教科書としても他の追従を許さない。

加えて、最新のトピックスとして腰痛と脳、慢性炎症との関連も述べられ、余すところなく腰痛に関する最新知見が述べられている。特に編著者の主要研究分野である神経根の形態的解説では多くの屍体解剖による説得力のある図表がちりばめられており、また椎間板ヘルニア・腰部脊柱管狭窄症などの病態に関する動物実験やバイオメカニクス研究など、基礎研究を基盤

とした解説は臨床での疑問を氷解させる説得力と読み応えがあり、臨床医として腰痛の概念を理解するうえでこの部分だけでも精読する価値がある。

画像検査の項目では、各検査モダリティによる画像所見と腰椎の立体構造が臨床所見と絶妙にリンクし、芳醇なワインに添えられた極上のチーズのように各々の画像に有意義な意味合いを添えている。一方で、ともすると外科医が後回しにしがちな疫学と自然経過などについてもエビデンスを示しながら丁寧に示しており、どのページを開いても新たな知見を得られる驚きと喜びに満ちあふれている。いわゆる「腰痛」の教科書は多数出版されているが、このような深みを持つ書物は他に類を見ない。

本書の中で編著者は、患者の求めている腰痛治療に際して医療者が自らに問うべき3項目を次のように挙げている。「より優れた診断能力をもっているか」「患者の経過をみるうえで必要な、より高度な知識や信頼関係確立のknow-howをもっているか」「より優れた治療技術をもっているか」——果たして、われわれのうちどれだけがこの3つを念頭に置き、そして身に付けながら診療に当たっているだろうか。いずれも経験や学年にかかわらず医師として一生をかけて修得すべき項目であり、医師としてのわが身を振り返り自戒しながら未来の自身を築くための礎となるであろう。

これは教科書ではない、と編著者が称する本書『腰痛 第2版』は、先述のように実際には腰痛のバイブルと言っても過言ではなく、臨床診療に従事する実地医家であれば一度は目を通しておきたい事柄がふんだんに盛り込まれている。腰痛診療を、art(医療従事者一人ひとりの経験の蓄積)からエビデンスを基にしたscienceへといざない昇華させている本書は、まさにわが国における腰痛診療の集大成とも言うべき1冊であり、机上に常備し一生をかけて読み込むに値する。本書をひもといた読者の経験や知識、年数に応じた知識や問いかけを常に投げかけてくれる本書は、編著者の一筆入魂の腰痛哲学が込められた書物として必ずや医師、コメディカル含め多くの腰痛診療従事者を啓蒙し、腰痛診療の新たな扉を開いてくれる1冊となることを確信し自信を持ってここにお薦めする。

B5 416頁 2014年

定価：本体8,600円＋税

[ISBN 978-4-260-01915-6]

医学書院刊